

会津の歴史シリーズ



第10回 会津の女性たち

湯田 祥子 (ゆだ さちこ)

若松城天守閣郷土博物館
学芸員



◆新島八重

会津だけではなく全国に当てはまることだが、歴史というのはどうしても男性目線・男性中心になってしまう。歴史の表舞台に立つのは男性ばかりであり、時代を動かしてきたのはいつも男性である（ように見える）。女性は、よほど身分が高いか、もしくは大きな出来事に関わった女性、芸術家などでもないかぎり、大多数の人々はその名前すらも伝わらず、生き方どころかその日常でさえほとんどわからない。記録に残らないのである。しかし、なかなか注目されにくいというだけであって、女性が重要な役割を果たすことももちろんあったのである。

歴史上有名な会津の女性というと、最近だと数年前にドラマの主人公として一躍有名となった「新島八重」がまず筆頭にあげられるだろうか。彼女は会津藩の砲術指南役の家に生まれ、戊辰戦争では自分も銃を手に取り、最初の夫である川崎尚之助と籠城戦を戦い抜いた。川崎とは残念なが

ら戦後すぐに離縁したと考えられるが、明治の世に入り京都に移り住んでからは、二番目の夫である新島襄と共に教育の普及に尽力し、また襄が亡くなってからは日本赤十字社の活動に参加し、篤志看護婦として日清・日露両大戦では傷病兵の看護に従事している。八重は、この功績が認められ、明治29年には勲七等宝冠章を、同39年には勲六等宝冠章をそれぞれ授与されている。「福祉」という方面に着目し活動するその姿からは、やはり自分が戊辰戦争で経験した悲劇からうまれたであろう、弱者へのいたわりの心が見えてくる。

一方で、八重が伝統文化の一つである茶道に傾倒し、自ら人々に茶道を教授するまでになり、やがては奥秘を授けられたことも見逃せない。茶名を「宗竹」と名乗った八重は、当時はまだ男性が圧倒的に多い茶道の世界のとびらを開き、女性が進出する手助けをしたのである。現在のように女性達が茶道に親しむことができるようになった、そのきっかけづくりのお手伝いをしたのが八重だ



新島八重（同志社大学 同志社社史資料センター蔵）

と言っても過言ではないのである。

彼女が見せた行動力は、同時代の一般的な女性像とは若干隔たりがあるかもしれない。八重の場合は、夫である川崎尚之助・新島襄らの理解と後押しがあってこそ、ある程度自分の望む生き方ができたと言える。この時代は、女性が前面に出て意思表示をするのがまだ非常に難しい時代である。三従さんじゅう（幼い時は父兄に従い、嫁いでは夫に従い、夫亡き後は子に従う）が婦女のあり方として教育されてきたこの時代に、自分の意思を明確にして主張することは、現代の私達が想像する以上に風当たりが強かっただろう。それでも、周囲の批判や陰口などはものともせず自分の目指すところに進んでいく強さが、八重の生涯におけるい

くつもの功績をうみだしている。

◆大山捨松

さて次に、同時代の会津の女性として有名な人物をもう一人紹介する。それは大山捨松おおやますてまつである。彼女は、幕末期に会津藩の家老職を務める山川家の末っ子に生まれ、当時の名は咲さきといい、戊辰戦争がおこったときにはまだ10歳にも満たなかった。しかし、多くの会津藩の女性・子供らと同じように幼いながらも籠城し、過酷な環境を生き抜いたのである。敗戦後は家族と斗南（現在の青森県）に移り住むが、やがて家族とはなれて一人だけ箱館で暮らした。

そんな彼女に転機が訪れたのは、明治4年（1871年）である。10年もの長い年月、国費でアメリカに留学することになったのである。この時母は「捨てたつもりで帰りを待つ」という意味を込めた「捨松」という名を咲におくった。同年の末には渡米し、捨松らの未知の国での生活がスタートした。やがて捨松はハイスクールを経て当時アメリカでも名門女子大学とされていたバツサーカレッジに入学し勉学に励んだ。バツサーカレッジを卒業する時には総代の一人に選ばれ演説をしたほどであるから、捨松が留学生としていかに優秀だったかがわかるだろう。10歳そこそこで、日本初の女子留学生として海を渡った少女は、アメリカで一流の教育を受け、知識を身に付け、日本に帰国する。

捨松は、帰国後は自分が学んできたことを国家の役に立てたい、日本の女子教育に役立てたいという希望を抱いていたが、当時の日本は女子教育に対する概念がまだまだ弱く、捨松自身が教壇に立って女子を指導するという機会はずいぶん得られ

なかった。しかし、ここでまた捨松に転機が訪れる。当時陸軍卿をつとめていた大山巖おおよまいわおとの結婚である。戊辰戦争の時には敵として会津を攻めてきた“会津藩の宿敵”大山との婚姻が調うまでには、多くの困難を乗り越えなければならなかった。しかし、捨松にとって大山巖という存在は「国家の役に立ちたい」と願っていた夢を実現に近づけてくれる最高のパートナーだったのである。こうして捨松は大山捨松として歩み始めた。

陸軍で重職につき、明治時代の日本の国政という観点でも重要な役割を果たしていた大山巖の夫人として、捨松の活躍の場はどんどん広がっていった。おそらく一番有名なのは、見事な欧米式外交術を取り入れた鹿鳴館での夜会外交だろう。その優雅さ、完璧なマナーは「鹿鳴館の華」とうたわれたほどである。また、捨松がアメリカ留学中に学んだ慈善事業やボランティア精神といったものが日本で初めてのバザーの開催などで実践されたり、看護学校を設立するための準備をしたり



大山捨松（国立国会図書館）「近代日本人の肖像」より

と、多岐にわたった。同じ留学生の一人だった津田梅子だうめこの女子英学塾（のちの津田塾大学）設立の支援にも力を尽くした。

このように、近代国家として走り出したばかりで欧米諸国に肩を並べようと躍起になっていた当時の日本にとって、国家としての成熟過程で捨松が果たした役割は大きかったのである。

◆女性達の功績

これまで紹介してきた二人に共通するのは、戊辰戦争を経験し、その後の人生が一変したということである。これはもちろん二人に限ったことではなく、会津藩の人々全てにいえることだが、みな戦によって全てを失い、そこから再起しなければならなかった。会津の長い歴史にとって、日本史上からみてもターニングポイントとなった事柄はいくつもある。その中でも、やはり戊辰戦争というのは一番重く、一番多くの人々の人生を狂わせた出来事だったのである。

今回、会津の女性、特に武家出身の女性二人を紹介したが、彼女たちはサムライの時代には厳しい身分制度の中で一番上に位置する武家の役目・責任を自覚して行動し、明治時代に入り武家という身分から解き放たれた後は、それまでの“会津”という国（藩）から日本という国家へと目を向け、自分の立場や与えられた役割を自覚して率先して行動していたのである。そして、彼女達の行動が当時の女性達の励みとなっただろうこと、また女性達の社会進出や女性の地位向上に一役も二役も買っていたということは想像に難くない。そんな素晴らしい女性が会津から輩出されていることを、私たちはもっと自慢しても良いかもしれない。